

# キリシタンの街「野津」

平山喜英

ヴァリニャーノは一五八〇年九月八日に現在長崎県口ノ津を出発し十四日に豊後に到着した。臼杵に隠退していた大友宗麟は巡察師を招いて観迎の宴を催した。巡察師は十月にこの地で宣教会議を催し十二月二十四日には「修練院」を開校し、ベドロ・ラモンを初代院長に任命するとともに、みずから開院そうそう午前と午後<sup>10</sup>に二講座を担当しフロイスに通訳をたのんだ(松田毅一氏著天正少年使節P31より)。右の文章の如く一五八〇年つまり天正八年前後は宗麟の隠居した臼杵を中心として此の野津の街も、華やかなきりしたんの全盛時代の幕開けであった。マリオ・マレガ師著豊後切支丹史料の年表には一五七八年(天正六年)大友義鎮公フランシスコの霊名にて受洗す(十月二十八日)義統を継嗣とし臼杵城外に隠居せり義統臼杵城内に聖堂を創立す。フランシスコ日向を攻め義統は野津市を居所とす野津市の領主リンセイ霊名レオを以て受洗す野津市に百名の受洗者があり其の年迄全豊後の信者数は僅に二千人なりき、云々、亦翌一五七九年(天正七年)に

野津市にてリンセイ・レオが聖堂を建て墓地を設けて山の上に大十字架を創設すとある。亦半田康夫氏著の豊後キリシタン遺跡P<sup>107</sup>に、野津は耶蘇教の栄えた町である。たとえば一五八〇年十月二十一日付のバードレ・ロレンソ・メシヤの書翰に右両住院(府内及び臼杵)の外に住院二ヶ所を設けることを可決せり一つは臼杵より三レグワの野津にして此処に約三千五百のキリシタンあり附近の町々に於ても多数の人帰依すべき様子なり同所には又レアンが建築せる好き会堂あり、と書いてあり亦、P<sup>103</sup>に、一五八五年(天正十三年)フロイスの耶蘇会総長宛報告書に野津の宣教師駐在所の管内には十四、五の十字架がある、となつてゐる。前記各種の文献によつても野津が耶蘇教の非常に栄えた街である事は明白であるが、尚現在に残る各種文獻、各種の遺物(特に野津キリシタン記念館収蔵品)啓崖クルス、町内各地区に残るきりしたん墓等の種別、数量、クルスバの地名数ヶ所に及ぶ此の現実、更に野津キリシタン記念館所蔵の古文書による元禄八年(一六九五年)に未だ新切支丹本人に御座候に付き、との一文がある。宗麟が受洗してから実に百十七年を経過しているのである。此の様に野津のきりしたんは何故に漸増し繁栄したのであらうか。一六一七年(元和三年八月)日本人信者がバードレの活動状況を書いた文書の内、野津の貴理志端中左の理りと書記す者也、の中に貴理志端中の御合力として

御一命を惜まれず夜昼共に御辛勞なされ候事、とある如くバードレの必死の活動もさる事ながら第一に此の野津地区は大友家にとって深いつながりのある土地である。第二に地理的及び交通に重要かつ中心的地域である。第三に軍事的には堅固な要害の地区であった。深い谷、高い山、其の山上約十ヶ所が城或は砦となっていたのである。

そこで第一の大友家とのつながりについては豊後国志卷之九、十一に到明寺廢址在野津莊寺小路村紀聞日大友義鑑天文十五年建精舎附田名到明寺十九年小佐井田口等弑義鑑後遂葬干此以為法とある又天正六年大友、鳥津の両家各地に戦を交えた当時大友義鑑は嘗っては仏教に帰依し字寺小路に邸館と称して到明寺を建立したが義鎮(宗麟)も鳥津軍を迎うるに當って同所に滞在して総指揮に當つたという事であると野津町誌P<sup>23</sup>に記してある。尚又同ページに薩軍は益々軍を養い兵を練り期の熟するのを見て天正十四年十月九州統一の大望を謀るに及んだが、これに反して大友方では道雪亡き後の義鎮(宗麟)は再び元の暗君に立戻り切支丹熱に煽られた。到明寺は廢してレジデンシャにした、とある。つまり一五四六年に義鑑が建立した到明寺も一五八六年には修練所となつたのである。其の間四十年、義鑑が死んで三十年後でありヴァリニャーノが臼杵に来て都、豊後、下の三教区に分け教化活動に着手してから六年後であつた。

拘野津町誌P<sup>317</sup>に臼杵小鑑に到明寺野津にあり今廢す善多羅山と号し往古禪宗の大地なりとある現在此の到明寺ほどの位置にあつたのか明らかではないが前記の事由と現在残る地名等より現在城ヶ平の地名が残る所が邸館の有つた位置と思はれる。一平方米以上の巨大な石で長さ数十米に及ぶ石垣が残つて居り本丸址と呼ばれる所では面積は約千平方米二の丸・三の丸は約五百平方米で本丸、二の丸、三の丸の境にはそれぞれ藁研彫の様な空堀がある。

其の横に約三千方米程の段々畑がある此処にボダラと言ふ地域がある。此処が到明寺跡であらうと思ふ。其の下に部落の人が天神様と呼ぶ小高い所がある何時の時代より天神社を御祭りし出したものかわからないが現在は何も残っていない私はマレガ師の一五七九年天正七年野津の領主レオが山の上に大十字架を創建したと言ふのは此方ではないかと思ふ。山城の形体を残した地名が平と言ふ所、其の横に隣接するボダラの地名を残す地域、其の下方でしかも小高くなり遠くからでも眺望のきく天神様、真に巨大な十字架塔が此の位置にあつたと言つても当然であらう。現在野津キリシタン記念館は其の天神様の下にある野津キリシタン記念館建設に際し宅地造成の折は五輪塔の断片が多数出土した此の事により此の附近には墓地があつたのではないか

と思われるのである。

第二に地理的条件については豊後国誌卷之九、七に野津駅在野津在  
今日野津市蓋古置軍国時有駅となつてゐる古老の話では舟も着いてい  
た様で入船の地名なども残つてゐる。

馬や駕籠、船などにより往来のはげしい又市なども立ち商取引も盛  
で軍団も居る真に華やかな街であつた国主の居館などもあつたのであ  
るから城下町と言つたいかめしさも多分にあつた。現在でも大分、佐  
伯、臼杵、三重の中間の位置にあり交通は利便である。

第三に軍事的には野津町誌<sup>P 337</sup>に野津郷誌より採録とし左記を記載  
してある。

天正十四年十月十八日（一五六六年）の頃薩軍野津院へ押し寄する  
の由聞えしかば、広田大膳、臼杵掃部助、同内記兵衛鎮実、同又兵衛  
尉、広田弾正左衛門、同内右衛門、同新助、同喜右衛門、堀民部承、  
同隼人佐、井上左馬助、同兵助、岩尾道閑等を大将として、王子城に  
立籠り、敵軍の侵入に備えたり。敵將白浜周防守、屋合伊勢守兩人兵  
を率いて攻め来る。城兵元より覚悟の事なれば、散々に之を射る。敵  
軍は之に応戦せずして、和を誘めて三昼夜に及べども之を承かざるの  
みか、討取れ射取れとのみにて砲天を打ちかくれば、敵も力及ばずし  
て、中村岩瀬という所に退き却く。城兵も王子を去つて八戸に陣を移

せし処に、薩州の将鎌築後守と云いける者、川登泊村に宿營するの由  
を聞き、十一月二日臼杵内記兵衛鎮実、聞くひとしく押し寄せて之  
を討ち取るとある。野津は其の面積が約十五万アールであるが其の中  
に右五子城城主広田大膳、星降城城主柴田紹安、武山城城主実相寺統  
国、冠城、楯城、筒井城城主重相寺統国（武山城主と同一人物と思はれる）  
鍋田城、元越城、岩瀬砦、城ヶ平館の十ヶ所があり軍事的に如何堅固  
であつたかが思はれるのである。第二次大戦中は国道十号線中ノ谷トン  
ネル附近は要塞地帯で写真撮影等は一切禁止されていた所でもある。

前記の様な事由に依り此の地野津のきりしたん達は其の教えを遵守  
するも又展開するも真に地の利を得た処と言るのである。

未だ整理中であるが野津きりしたんの人名一部を左記に記載し其の靈  
の安らかに眠むられん事を祈るものである。

野津キリントン記念館は其の彼等の足跡を更に詳しく知る事の出来  
る豊後に唯一の資料館である緒兄がもし許されるならば今一たび此の  
野津の地を踏んで四百年前のきりしたん達の華やかさを思ひたいだ  
ければ幸である。

野津キリシタン人名簿

赤迫村	市村	寺小路村	日当村	部落名
	助三郎 前善介女房 善助女房 前吉右衛門	老休 祖休 弥十郎 前弥十郎	庄三郎 作左衛門 市右衛門	大庄屋 神野文書
三助 三吉	吉右衛門		茂左衛門 孫助父浄印 太右衛門 祖母	真宗 正光寺文書
		老休 堅介妻まつ		白杵 御会所日記
加助 次右衛門 兵衛	吉右衛門 後家	市藏母 小三郎母 老休 後堅助 六郎右衛門	市右衛門 佐左衛門	マリオ・ マレガ文書
		平山宮内 平山堅介		其の他

持田村	菅無田村	池原村	筒井村	部落名
		次郎七女房	吉左衛門 女房	大庄屋 神野文書
	弥右衛門 下人亀松	次郎七妻 勘三郎 源六女房	吉左衛門母 半之丞	真宗 正光寺文書
孫助妻 ふで	清九郎			白杵 御会所日記
	新九郎 女房	六郎兵衛 女房		マリオ・ マレガ文書
	吉左衛門	七兵衛 久兵衛 七兵衛 六兵衛 六兵衛女房		其の他
	善太郎 弥右衛門 長四郎 権左衛門	次郎七妻 與三母 半兵衛		
		留左衛門		



	下藤村	部 落 名
	弥 助 新右衛門 藤左衛門 藤左衛門 長 助 前助左衛門 藤 兵 衛 吉兵衛女房 長左衛門 女房	大庄屋 神野文書
	藤左衛門 喜左衛門 茂左衛門 吉之丞女房 龜之助 妻たら 伝四郎 母妙林 專 次 郎 新八女房 龜之助 な る 弥 藤 三 郎	真宗 正光寺文書
	休 清 助 七 源右衛門 久 助 善右衛門 後家ふめ 休清世粹 久藏 甚右衛門 後家	白杵 御会所日記
庄 弥 内 助 女房	伊右衛門 弥右衛門 新右衛門 助 新右衛門 喜 助 太藏女房 新三郎女房 女房 善右衛門 善右衛門 女房	マリオ・ マレガ文書
	善九郎	其 の 他

	広原村	部 落 名
	吉兵衛 吉兵衛女房 藤兵衛	大庄屋 神野文書
		真宗 正光寺文書
	次郎左衛門 夫婦 助左衛門 夫婦 源 七 郎 吉兵衛女房 太郎次郎 又 助 孫 三 郎 女房 助左衛門 新左衛門 又 助 久左衛門 後家 甚右衛門 庄介女房 勸 七 庄 介 久藏女房 休 清 久 藏 次郎左衛門 勸八女房	白杵 御会所日記
助藏後家 はる 休 意	前藤兵衛 与 市 郎 次郎左衛門 藤兵衛・娘 源 七 郎 吉兵衛女房 太郎次郎 又 助 孫 三 郎 女房 助左衛門 新左衛門 又 助 久左衛門 後家 甚右衛門 庄介女房 勸 七 庄 介 久藏女房 休 清 久 藏 次郎左衛門 勸八女房	マリオ・ マレガ文書
		其 の 他

部 落 名	大庄屋 神野文書	真宗 正光寺文書	白杵 後會書日記	マリオ・ マレガ文書	其 の 他
廣 原 村			三吉 後三吉 次郎左衛門 女房	左兵衛 勘七 助藏 助右衛門 中助右衛門 女房 与右衛門 女房	
牧 原 村			次郎作	次郎作 次郎作女房	
黍 野 村	三右衛門	八郎父 龜之助	三右衛門 後家 弥左衛門 長兵衛 長兵衛女房	三右衛門 三右衛門 後家 弥吉後家 弥左衛門	

部 落 名	大庄屋 神野文書	真宗 正光寺文書	白杵 御會書日記	マリオ・ マレガ文書	其 の 他
木 所 村	長 長右衛門 伝左衛門 新左衛門 新次郎		助八 藏 勘左衛門	勘左衛門 左衛門 女房	喜兵衛
波 津 久 村	平		助平 助平助後家 あかい	助三郎 三郎左衛門 新之丞	
生 野 村			喜兵衛 前太郎 左衛門	喜兵衛 甚助女房 太郎左衛門 又三郎	志介女房
利 野 村			太良助 弥左衛門 後家あか	弥左衛門 弥左衛門 女房	

鍋田村	荻原村	小無礼村	内河野村	部 落 名
		甚 内	専助女房	大庄屋 神野文書
	加右衛門			真宗 正光寺文書
	甚 後家あか 宮内 清左衛門 道 庄助妻 かめ	浄 庵	又次郎 専助妻くま	白杵 御会所日記
前清左衛門	甚吉後家 久兵衛 加右衛門	清左衛門 九兵衛 九兵衛女房 新兵衛	専助妻くま 太郎助	マリオ・ レガ文書
		勘左衛門 甚六 惣介	前七郎 後七郎 又次郎 惣助下人 又次郎	其 の 他

長小野村	寒田村	御霊園村	黒坂村	部 落 名
	久助	久左衛門 弥左衛門 茂兵衛		大庄屋 神野文書
孫右衛門 彈右衛門				真宗 正光寺文書
又藏 庄兵衛 七	久助	喜左衛門 六兵衛妻 喜左衛門 妻さく	道喜 平左衛門 理左衛門 庄左衛門 理左衛門 妻かめ	白杵 御会所日記
又藏 庄兵衛 工喜	久助	喜左衛門 平左衛門 吉右衛門 娘なる	弥三衛門 弥三衛門 甚左衛門 甚左衛門 女房 女房	マリオ・ レガ文書
源右衛門 傳右衛門 西		忠兵衛妻 茂右衛門	吉右衛門 左右衛門	其 の 他



山奥村	福原村	松原村道	野上長村小	部落名
		円		大庄屋 神野文書
				真宗 正光寺文書
傳兵衛 喜左衛門 甚右衛門 彌 太左衛門 傳 玄 玄覺妻 あかり	後家まつ 重兵衛 小兵衛 市左衛門 小 兵衛	久之丞 新太郎	正 兵右衛門 庵	白杵 御会所日記
	傳兵衛 太左衛門 後家妙円	新太郎女房 与左衛門	喜助	マリオ・ レガ文書
	の娘あかい 傳兵衛係さ	甚右衛門	又 藏	其の他

戸上村	長谷村			部落名
				大庄屋 神野文書
				真宗 正光寺文書
吉之丞 宗 勘三郎 作藏	久兵衛 長左衛門 小 七	妻あか 九郎左衛門 孫左衛門	傳兵衛 甚兵衛 正兼 利右衛門 太左衛門 後家妙円	白杵 御会書日記
宗 休	久助 岡本 元○郎	前吉右衛門 後家妙貞 久兵衛 平右衛門		マリオ・ レガ文書
岡本 元○郎 字平次 明名左七	久助 岡本 元○郎		無覚妻 あかい 伝兵衛 無覚 喜左衛門 さの	其の他



入北村	桑畑村	赤嶺村	吉岡村	篠枝村		部落名
						大庄屋 神野文書
						真宗 正光寺文書
	太郎作 前左衛門		半左衛門 下女いせ	孫兵衛 善右衛門 与左衛門 妻ふく	長三郎 女房	白杵 御会書日記
三九郎女房		堅知妻	左衛門 下女いせ	与左衛門 孫兵衛 後孫兵衛 与左衛門 女房	藤右衛門	マリオ・ レガ文書
弥吉後家						其の他

八熊村	奥畑村	河平村	出羽村	椎原村	折立村	竹脇村	部落名
傳兵衛 前女房				傳左衛門	弥五郎		大庄屋 神野文書
	万半之丞 吉	由左衛門 母妙閑	市兵衛 女房	理兵衛	太兵衛 女房妙応	太兵衛 甚七	真宗 正光寺文書
						吉右衛門 後家つじ	白杵 御会書日記
三右衛門妻					吉兵衛	次郎右衛門 妻	マリオ・ レガ文書
	吉兵衛						其の他

岩瀬村	大内村	田中村	持丸村	竹部村	部 落 名
吉右衛門	加左衛門		勘左衛門	道兼	大庄屋 神野文書
庄 内	女房		女房	女房	
半兵衛		角八後家			真宗 正光寺文書
母金			勘右衛門		臼杵 御会書日記
蔵坊			妻はて		
		弥兵衛			マリオ・ マレガ文書
		女房			其の他

松尾村	塚田村	才原村	溜水村	亀甲村	水地村	部 落 名
忠左衛門		吉兵衛	新之丞		孫右衛門	大庄屋 神野文書
新三郎		長右衛門	介作		女房	
女房		女房	助作			
前太左衛門		よし	善六			
太左衛門			女房			
	正蔵坊		新之丞			真宗 正光寺文書
	後家		女房			臼杵 御会書日記
			助作			
			後家			
			新之丞		孫十郎	マリオ・ マレガ文書
			妻		女房	
			下女さい			其の他

部 落 名	大庄屋 神野文書	真宗 正光寺文書	白杵 御会所日記	マリオ・ レガ文書	其の他
田良木村	宗 塚 吉左衛門	宗 塚 成左衛門 利右衛門	宗 塚 三宅文基 （之助）	宗 塚 三宅見輪 （和五郎）	
藏園村			茂右衛門		
名塚村	勘左衛門	久三郎 正光寺下人 孫市郎	勘三右衛門		
備後尾村	与三郎女房 後与三郎 女房	与三郎 妻 長助 後家 作平 長兵衛 下女はな	九左衛門 後与三郎 女房		
小屋川村	助左衛門				
田ノ平村	又八郎女房	又八郎女房			
落谷村	介右衛門	弥次郎 孫兵衛女房	市郎後家 兵衛	吉右衛門 治郎兵衛	
久七					

部 落 名	大庄屋 神野文書	真宗 正光寺文書	白杵 御会所日記	マリオ・ レガ文書	其の他
源之丞	八左衛門	市郎夫婦 弥次郎 三太郎後家	仁兵衛女房 太郎助 久兵衛	善四郎 次郎兵衛	
黒土村	市左衛門	勘次郎 孫三郎	孫三郎女房		
蕨野村	七右衛門 七右衛門 女房	善右衛門 女房	弥太郎 七右衛門		
清水原村	存兵衛後家 李之丞後家 与三郎	善四郎 新兵衛 久太郎	源内 作兵衛 久太郎		
岩崎村	清兵衛 女房	与三兵衛 妻すて 前加兵衛 女房			

遠久原村	泊村市	部落名	大庄屋 神野文書
	介	真宗 正光寺文書	
	五郎助	白杵 御会書日記	
源兵衛 吉蔵	久蔵 後家みや 七兵衛 妻かめ	与左衛門 後家ほそ 市助 久兵衛 甚三郎 六助 六助 長妻ふく 喜右衛門	マリオ・ レガ文書
市郎兵衛 中次兵衛 七右衛門 女房	源兵衛 新助 前女房	市蔵 弥蔵 弥左衛門 与左衛門 女房 甚三郎 九兵衛 前与左衛門	其の他

中野村	岩屋村	東神野村	西神野村	恒河内村	部落名	大庄屋 神野文書
	吉右衛門 茂兵衛	六右衛門 喜右衛門	久兵衛 女房	孫右衛門	真宗 正光寺文書	
	又三郎 妻ふく			休意五郎 六郎右衛門 庄八	白杵 御会書日記	
左吉 助左衛門 妻阿か	新之丞妻 清蔵妻 又助 市蔵	吉右衛門 久三郎 妻ふく	茂兵衛	又助 市蔵	マリオ・ レガ文書	
孫兵衛 十兵衛 市右衛門 市之介	茂兵衛		長左衛門	新助母 助八	其の他	
左吉						

白岩村	豊倉村	部落名
		大庄屋 神野文書
藤四郎 吉之丞母 弥五郎女房	吉内母妙解 藤左衛門	真宗 正光寺文書
弥五郎 清左衛門 弥五郎女房		白杵 御会書日記
吉之丞 茂左衛門 弥五郎女房 太右衛門	市助女房 市左衛門 伊右衛門	マリオ・ マレガ文書
大右衛門		其の他
		弥五郎 兵七 定次